フエ情報帳　1999

都市の成り立ちを探る

フエ京城図

フエでは山、河川をはじめとする豊かな自然と高温な気候のもとで、快適な環境を創出するために、立地条件を活かした配置計画・都市計画がとられていると考えられる。ここでは、フエ京城建設の流れを整理し、その背景にある都市の計画理念を自然や地理的条件などから明らかにし、現在のフエを形作っている都市の歴史的文脈の基盤の根幹を探る。

■フエの沿革

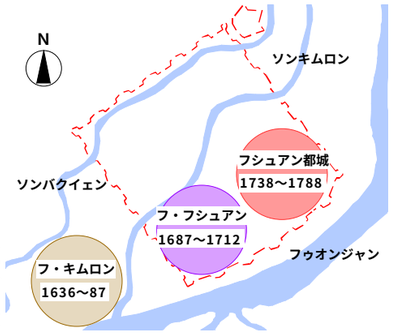


図１　フエ建造以前の都市と河川

フエはグエン（阮）朝の都城として建造されたが、グエン朝は1802年から1945年まで続いたヴィエトナム最後の統一王朝である。グエン朝成立の経緯は、黎朝後期から北方のチン氏と南方のグエン氏に分裂し、グエン氏の活動拠点はフエ周辺におかれた。それは、フエ（順化）都城に至るまで、愛子營、茶鉢營、營葛、福安府、金龍府（フ・キムロン）、富春府（フ・フシュアン）、博望府、富春都城（フシュアン都城）という経緯をたどり、中でも、フ・キムロン（1636年～1687年）はフエ西部のキムロン地区に存在し、それ以後（1687年～1712年）に、フゥオンジャン（香江）とソンキムロン（金龍河：現存せず）に挟まれた地区、すなわち現フエ旧市街の西南側1/4に相当するフ・フシュアンがあった。さらに1738年から1778年までフシュアン都城が現フエ旧市街の南東側1/4に相当する部分にあった。（図１）。このような経緯の後にグエン朝の首都としてフエが登場したわけであるが、1858年のフランスがダナンを砲撃、1883年にはフエも陥落し、その後は仏領インドシナとなり、グエン朝もフランスの支配下におかれた。そしてフランスの統治は1946年の対仏第一次インドシナ戦争勃発までつづき、フランス統治の終焉とともにグエン朝も崩壊した。

フエの都市形状はフゥオンジャンを挟んだ新市街と旧市街からなり、旧市街（京城）は2.5km四方の城壁に囲われ、その内部前面には0.6km四方の皇城が置かれている。これらの城壁は現存する。また都市とは離れてフゥオンジャン流域に歴代皇帝やその家族の陵墓が点在する。

都市の性格は当然ながら当初は首都ということで、執政都市であり、城塞都市であった。特に京城内においてはほとんどが王族と官僚の施設であり住民はほとんど存在していなかった。（図２）しかしながら、王朝が崩壊し、またヴィエトナム戦争が激化するにつれ避難場所として京城内に住民が流入し、以来、生活都市としてその性格を変えてきた。

現在は生活都市としての位置づけが定着し、そのたどってきた歴史をバックグラウンドに持ちながらも、急速な近代化を遂げようとしており、その目まぐるしい変化の中で独自の変容を続けている。

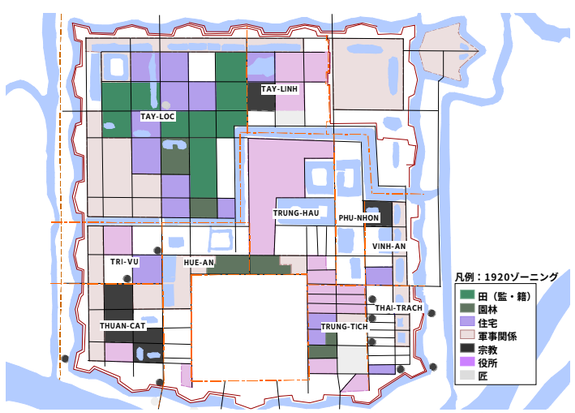
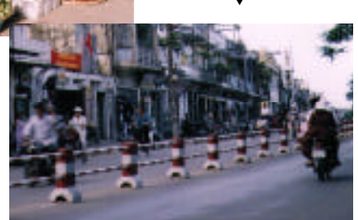


図２　グェン朝時代ゾーニング（1920）

▲
市場の様子
果物が見事に並べられている。市場は活気があり、食材や衣類など生活に必要なものはなんでもそろう

交通手段
現在のフエは交通手段としてバイクや自転車が主流だ。車は多くない。しかし通勤ラッシュ時はかなり混雑する
▼



■フエ建造時における計画理念

フエは1803年～1805年に計画され、1805年～1832年の28年間を費やして初代皇帝のザーロン（嘉降）帝（1802-1819）、2代目皇帝のミンマン（明命）帝（1820-40）の二代にわたって建造された。その計画はいくつかの理念に基づかれたと考えられる。

①外来文化ー風水・礼制、ヴォーバン式城壁

●中国による風水の影響

フエには、中国の影響から礼制・風水思想が根付いており、現在も受け継がれている。そのほか五行などの思想も同様に存在し、当然ながら都市においてもその建造時期に計画理念のひとつとして重視された。風水思想が都市計画に配慮されたのは主に3点である。

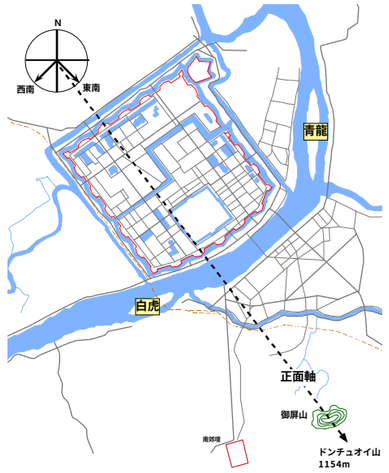


図３　フエ建造時風水思想

1.方位：聖人を皇帝として捉え都市（京城）の正面を南面とする「聖人南面而聴天下」。東南４５度から南西４５度の間ならば良いとされている（図３）。フエでは東方向におよそ30度傾いている。

2.屏風山：屏風山とは都市への悪気の侵入を妨げるものとして山を屏風に見立てたものである。この屏風山にあたるのが御屏山と名付けられた１０３mの山である。これはもとも2つの隣り合った山の間に盛り土をして人工的に台形の山を造営してしまったものである。そしてこの御屏山と対面する形でフエ京城は置かれている。このフエの正面から御屏山に向かう軸（以後、正面軸と呼ぶ；正面軸は城壁や街路と平行な都市軸とする）は、フエの前の都市であったフシュァン都城の軸と関係があるという説もある。

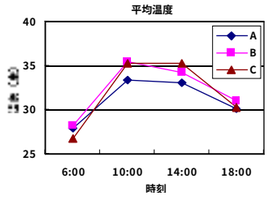
京城から見える御屏山
▼

フラッグタワーから見る北東の城壁
▼

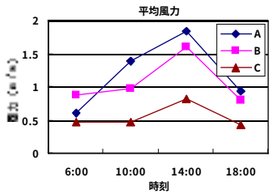
3.東西の青龍・白虎：フゥオンジャンの二つの中州をそれぞれ青龍、白虎にみたて都市を配置している。この位置関係が非常に強く都市の立地を決定づけている。

●フランスによる影響

一方フランスからの影響として、高さ6.6m・厚さ21m・約2.5km四方のヴォーバン式城壁が鋸歯状に京城を廻っている。また４面に400基の大砲で武装した24の稜堡を備えている。正面中央の稜堡は旗台となっており、北東角には鎮平台と呼ばれる砲台が張り出している。



グラフ1　平均温度



グラフ2　平均風力

②自然要因ー川の流れ、風向き、山への眺望

●川・風向

自然要因については、まず、フゥオンジャン、ソンキムロン、ソンバクイェンの川の流れが重要な要素となる。現フエはフゥオンジャンに面し、ソンキムロン、ソンバクイェンを取り込んで計画された。フエ建造以前の河の流れと、現在の御河、北側の池を見比べれば明らかなようにかつての流れの面影を色濃く残し、自然に取り込んでいる。

▲フエのシンボルでもあるフラッグタワー。風向きが観察できる

また、その他の自然要害として特に風向がある。フエでは午前中が南西の風、午後が北東の風が吹いているのだが、都市計画をするに当たって風向きも側面軸決定に大きな影響力を持っていたと考えられる。上のグラフはは８月～９月における観測の平均値を表したものである（図5のA,B,Cは風向調査の場所であり、グラフと対応している。）

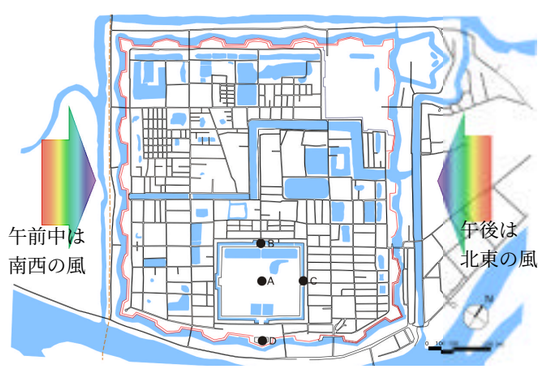


図４　フエの風向

▲　フエの山並み

●山への眺望

上記のようにフエには方位軸によらない独自の軸があると考えられるのだが、正面軸と側面軸は正確に直交しているわけではない。というのも、中国と同じ条坊制による碁盤目様街路形態をもつフエであるが、その主要街路の交差角を調べてみると、一部の例外をのぞいて0.5度から1.5度程度のずれが生じている。この要因としては都市造営に当たっての精度の不足とも考えられるが、むしろ、水路、濠などの延長にみられる山当てが挙げられる。

まず、旗台や京城の城壁の南端などから都市の西方に位置する山々を確認すると、金鳳山を南端に要する遠方１０Km程のところにある馬蹄形をした標高３００m級の山脈と、その手前の１００m級の山々があり、これが横軸の山当てに利用されていると考えられる。３００m級の山脈には金鳳山の他に肉眼で５つの山頂が確認できる。次に、王宮の周囲をめぐる濠、城壁、御河のラインの延長方向に対する山当てを確認した。図示した１～29（図5）がそれであるが、正面軸方向では２カ所（13、24）から山当てを確認出来た。これはいずれも御屏山(Nui Ngu Binh)の背後にそびえるドンチュオイ山（Dong Truoi）の頂に対するものであり、正確に山当てとはなっていないものの、その他の正面軸方向の調査ポイント（1、2,、10、11，12，23）からもその姿は確認できた。また側面軸方向は西方に山脈が連なっている関係で多くの山当て（6、7，9、18、19）が確認できたが、いずれも標高の低い山であり、山頂が明確でない。さらに皇城の城壁がよじれていたり、濠の岸にある手すりがよじれていたりするように、その建設技術の程度の低さ、もしくは時代とともに生じたひずみ故に、山当ては考えられていたもののその正確さを欠いていると考えられる。丈などの数値的なものと山当てとの関係からその誤差範囲内でゆがみを生じているという考え等を考慮すると以下の仮説が考えられる。

京城建造時に、正面軸方向に関しては、大南一統志[注16]の記述からも読みとれるように、城壁や御河をドンチュオイ山（Dong Truoi）の頂に当たるように計画した。或いはドンチュオイ山（Dong Truoi）をシンボルとして景観上の観点から取り入れた。一方側面軸方向に関しては山当ては存在そのものが山当ての重要性ということが全体の計画理念の中に位置づけられる。

▲王宮北堀からの山あて

なお景観上の観点からは金鳳山の存在も重要になってくる。金鳳山は標高443mの円錐形の目立った特徴的な形状をしており、フエの京城内の随所からその姿が視認できる。皇城や各壇、御屏山などとの位置的あるいは景観的な関係が見られるのではなかろうか。特に、位置関係を見るに当たって、羅盤を用いるなどが有効と考えられる。

▲御河からドンチュオイ山への眺め

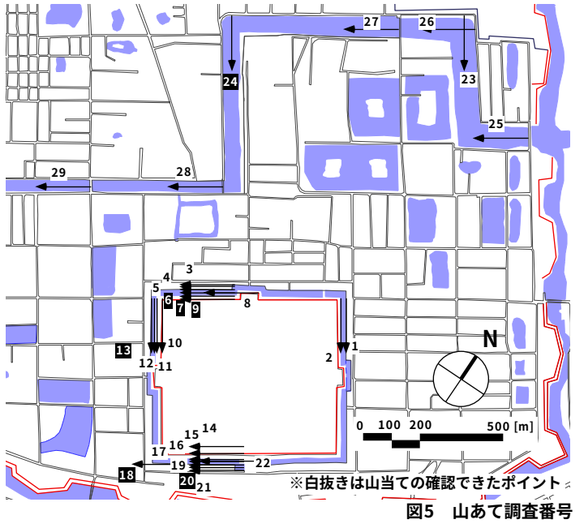


図5　山あて調査番号

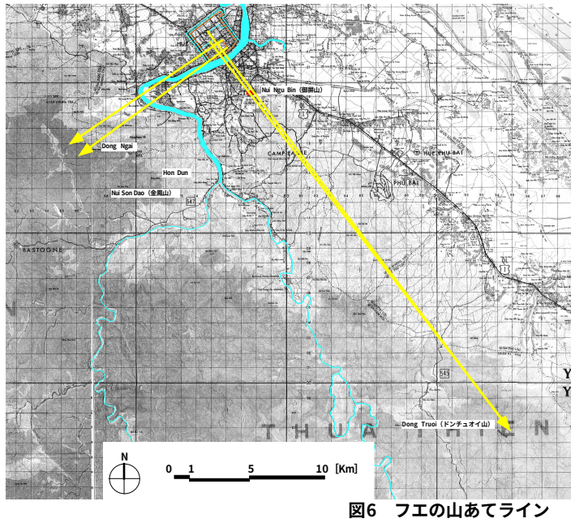


図6　フエの山あてライン

■フエの都市空間の構成原理と変容

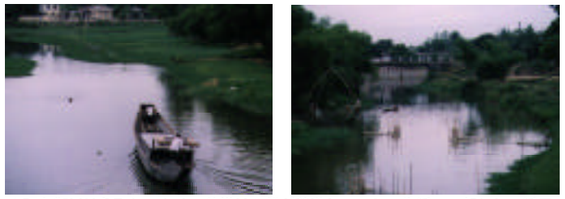
都市構成要素である街路と水系について20世紀初頭からの変遷を探る。

①街路形態

フエ京城の街路は中国の条坊制にのっとり、碁盤目様の街路網が形成された。街路間の間隔は基本的にはほぼ190mスパンである。現在においても街路形態は基本的に変化していない。都市の発展は新市街に集中し、京城内は城壁による制約を受けて形態的な発展は極端に低い。しかし執政都市から生活都市への移行と合わせて、一部の新興市街地の登場や公営住宅地の造営、そして根本的な、生活都市にあった街区規模への欲求に合わせて大街区の細分化が起こっている。また城門からの通りに商業機能が集中することで敷地の細分化が起こり、建築形態に大きな影響を与えており、このような傾向は今後更に進んでいくと見られる。

②水系

フエには水路や大小の池が存在するが、それぞれ人工的に整備、もしくは掘られたものである。当初の利用の一つに、防御等戦略的な目的がある。例えば当時皇城までつながっていた御川は皇帝の万一の逃避経路として京城北西の要塞へのアプローチとしての役割を果たしたといわれる。さらに御川は水運、皇城内および離宮などの庭園としての方池や曲池、また、御河後部においては農業用水としての利用がなされていたと考えられる。しかしながら、当初は執政都市であったため、水系の生活用水などとしての利水の意味合いはその後の生活都市への変貌とともに強まっていったと思われる。一方、水の制御の方法としては、城壁外のフゥオンジャンとつながった水路につながる御河に全ての池からつながる地下水路が設けてあった。しかし現在ではその地下水路が残っているものはあまりなく、さらに池が埋め立てられて宅地へと造成が進んでおり、雨期における洪水の懸念がある。北部においては完全に農業用水か、食用の水棲植物の栽培、漁業に用いられているが、とくに、皇城の側の池ではフローティングレストランや池ぞいの露店式のカフェなどの親水空間としての利用もされているなど、その利水としての利用形態は変化しつつある。



▲現在御川は魚取りのための仕掛けや船が移動しており、生活の一部として活用されている。

■まとめ

フエはその都市形成期にフランスのヴォーバン式の城壁を建造し、街路形態として中国の北京などと類似した条坊制を用いるなど他国の設計手法を積極的に取り入れている。そうした中でも独自の風水による計画思想などを確立し、周辺の地形や気候などの自然環境と呼応した環境との共生を計ったエコロジカルな計画理念を都市づくりに反映させている。しかしながら、その都市としての性格は、政治の場としての執政都市から市民生活の場としての生活都市へと大きく変化している。かつての王宮都市から残された水系などの資源を生活に取り込んでいくことが今後の課題であろう。

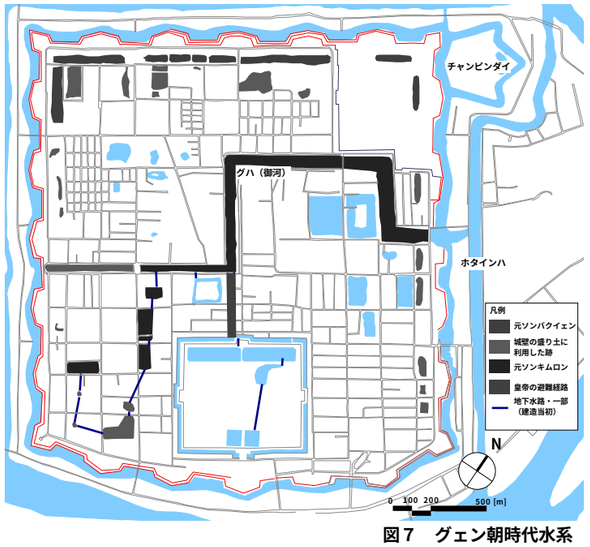


図7　グェン朝時代水系

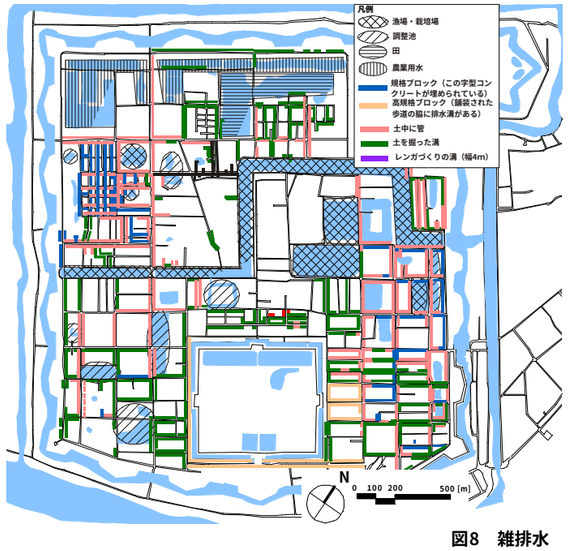


図8　雑排水